

金融不祥事と 金融機関の存在意義

金融不祥事は周期的に生じ、規制や防止策をいくら講じても絶えることはない。経済が好調になれば、利益を追求する金融機関はより大きなリスクをとり、その過程で不正な取引に手を染めるものが出てくる。やがて好景気の波が引いていくとともに、不正が表面化し、当事者は刑事罰を受け、金融規制は強化される。しかし、景気が上向けば規制緩和の声とともに、金融機関は再び野放図な取引に手を染める。

この六月にバークレイズ銀行の罰金で表面化したLIBOR金利操作事件は、総額三五〇兆ドルといわれるデリバティブや国際貸付の基準金利の不正であり、世界の有力銀行約二〇行が関与しているだけに、その問題の根は深い。金融立国の立て直しを迫られる英国政府の危機意識は大きく、シティにウォール街の競争原理を持ち込んだバークレイズの米国人CEOダイヤモンドは、儲けすぎの権化として辞任に追い込まれた。ウォール街では、ドックドフランク法の規制強化に反対する急先鋒であったダイモンJPモルガンCEOが、自らのリスク管理の失敗による巨額トレーディング損失で、その立

場を弱めている。この二つの事件で再び明らかになったのは、金融業界の閉ざされた仲間主義と、大きすぎて経営管理が不能になった巨大金融機関の問題である。金融が本来の経済に奉仕する機能を回復するには、競争的で透明性のある金融市場と金融組織が必要だ。金融機関は自己規律を高め、柔軟で効率的な組織にして行く必要がある。

①では、アメリカの住宅金融のバブルを最初に見抜いたシラー教授が、金融がイノベーションを通じ経済や社会に貢献する本来の役割を取り戻すことを求める。例えば、さまざまな保険の発明は、人々や企業が将来直面する可能性のあるリスクをヘッジする社会的に意味のある手段を提供する。問題は金融の過剰な行き過ぎにあり、それは金融機関自体の倫理や、より多くの人々が金融に参加し、イノベーションを享受できるようになるような民主的な手段によって防ぐことができる。ここでは金融規制は、金融に従事するプロフェッショナルが道徳的に正しい行動をとることを促すようなインセンティブを供与しなければならぬ。金融市場や組織がうまく設計され、民主化されれば、それは社会の発展の基盤になることを、金融に従

事する専門家たちそれぞれの役割と責任に触れながら具体的に提起する。

②は、九八年の日本の金融危機からの激動の一〇年を金融監督規制に携わり、二〇〇七年金融庁長官を最後に退任した規制当事者のかなり率直な回顧録である。バブルの失敗に懲りた日本の金融機関は、その優秀な人材を活用できず、横並びの発想で企業の発展にも貢献していないと著者は見る。この間、規制当局も米国直輸入のルールで、金融機関の自由な行動を妨げてきた面があるのだが、著者は規制も欧米を真似すればよいのではなく、市場参加者の洗練度が低い日本の実情に合わせ、国際競争力を高めるような制度設計と運営が必要だと考えてきたようだ。国際競争力を持つ製造業に学んで、自らの努力で金融機関は高付加価値を目指していくべきであるとする。金融機関の経営者と金融庁長官の間では、対話が少なかったことを率直な反省として述べ、お互いに緊張関係を持った主張と対話の必要性を説く。

日本でも金融不祥事は繰り返し生じている。金融機関自らの存在意義を問いただす自己規律、その活動の透明性と説明責任を求める金融監督と規制、それを促す国民の厳しい監視が必要である。

Robert J. Shiller

Finance and the Good Society

① Finance and the Good Society

Robert J. Shiller
Princeton University Press, 2012

金融動乱 金融庁長官の独白

五味廣文

② 金融動乱 金融庁長官の独白

五味廣文
日本経済新聞出版社
2012年3月